

開校にあたって

校長・塚田稔（玉川大学，日本神経回路学会会長）

21世紀に向けて、脳研究の新しい次元の展開が期待されている。しかし脳は、総合的、学際的な、研究対象であり、1分野の専門家を養成して達成できる研究対象ではない。研究設備や研究費の充実に加え、この学際的領域を研究する人材を育てることが最も緊急かつ不可欠な大事業である。

脳研究の理論と実験の領域を理解し、思想を持って研究する若手研究者を育成することが、このサマースクールの目的である。理論は理論の内に閉じるのではなく、実際の実験を通して新しい理論の創造と展開をすることが必要である。このサマースクールを受ける若手研究者に来る21世紀に脳研究を通して人類のために役立つ研究を期待する。

プロデューサー・藤井 宏（京都産業大学，日本神経回路学会理事）

日本神経回路学会は、本年から“神経情報科学サマースクール”を開校いたします。会長・塚田稔先生の情熱と発案によって、開校に漕ぎ着けることができたこの学校は、日本神経回路学会という（やや狭い）枠組みを超えて、これからの日本のニューロサイエンスを担う若者のために開放します。

この神経情報科学サマースクールは、ヨーロッパではすでに3回開かれているクレタ島の Crete Course in Computational Neuroscience がモデルではありますが、この企画に携わっているアドバイザーやファカルティー同のこの“サマースクール”にかける思いは、より一層切実だと思えます。それは、わが国の大学において Neuroscience Department、あるいは、そのような＜概念＞に基づいた学科が存在しないために、体系的な教育を受ける機会がないという状況を一步でもよくしたいというところからきています。

また、この“神経情報科学サマースクール”で目標とする研究者像は、＜理論を分かって、実験をやる人＞であり、また＜実験を分かって、理論をやるひと＞という新しいタイプの研究者です。その意味でこのサマースクールでは、理論系と実験系の両方からの若者に参加してもらえることを期待しています。また、講師陣もその両分野から招きます。われわれも近い将来には（できれば、来年度から）実験系と理論・シミュレーション系の両方の研究室のご協力を得て、Extension Course を持つ構想を練っています。これは、いわば仮想的な Neuroscience Department に当たるものです。

講師陣の一人として、今年はドイツ Freiburg 大学から Ad Aertsen 教授を招いています。この機会に、積極的に議論を挑まれることを期待しています。